

4 掌蹠膿疱症と抗菌ペプチド

Palmoplantar pustulosis and antimicrobial peptide

村上正基

MURAKAMI, Masamoto

愛媛大学大学院医学系研究科分子機能領域皮膚科学准教授

Summary

掌蹠膿疱症は手掌と足底にみられる多数の小膿疱を主徴とし、その膿疱は「無菌性」である。この疾患のとらえ方については、わが国では膿疱症としてみなされるも、米国を中心に本疾患を膿疱性乾癬の限局型とする考え方も存在し、議論が尽きない。その理由のひとつには、乾癬のようにマウスモデルなどが存在しないため、過去に報告された臨床例からの貴重な情報のフィードバックの積み上げによって病態が検討されているということが挙げられる。本疾患における膿疱は先行する小水疱を特徴とするが、この水疱がエクリン汗腺と関連があるか否かという問題を中心に、本稿では掌蹠膿疱症と抗菌ペプチドの関連性について論ずる。

掌蹠膿疱症

手掌と足底に多数の無菌性小膿疱が集簇性に出現し、遷延化すると著明な鱗屑を伴う紅斑局面の形成に至る。日常の外來診療でよく遭遇する疾患だが、かなり難治の経過をとることがある。

hCAP-18/LL-37

ヒト皮膚ケラチノサイトから分泌される重要な抗菌ペプチドのひとつ。皮膚ではケラチノサイトのみならず、エクリン汗腺(分泌部、導管)、脂腺細胞、肥満細胞、好中球などからも分泌される。

KEY WORDS

掌蹠膿疱症／抗菌ペプチド／hCAP-18/LL-37／エクリン汗腺／IL-8